

青森県立高等学校教育改革推進計画に関する地区意見交換会
(東青地区) (第1回) 概要

日時：令和2年9月3日(木)
13:30～16:00
場所：ラ・プラス青い森
2階 メープル

<出席者>

委員

勝野 義彦 委員、吉崎 博 委員、五十嵐 義人 委員、賀田 州一 委員、
工藤 幸治 委員、泉 夏樹 委員、載本 一 委員、木村 修悦 委員、
福原 正人 委員、小松 達弘 委員、前田 眞己 委員、濱田 一博 委員、
笹木 正信 委員、飛内 文代 委員、松野 洋祐 委員(進行役)

オブザーバー

穴倉 慎次 県立青森高等学校長、菅原 文子 県立青森西高等学校長、
前田 済 県立青森東高等学校長、高谷 悟 県立青森北高等学校長、
中道 哲 県立青森南高等学校長、吉澤 郁 県立青森中央高等学校長、
對馬 嘉晴 県立浪岡高等学校長、赤井 茂樹 県立青森工業高等学校長、
三上 雅也 県立青森商業高等学校長、渡部 靖之 県立北斗高等学校長、
甲田 隆 県立青森第二高等養護学校長

1 開会

2 委員紹介

3 事務局説明

(1) 青森県立高等学校教育改革推進計画に関する地区意見交換会設置要綱

- 事務局から、資料1について説明した。

(2) 地区意見交換会の進め方と今後のスケジュール

- 事務局から、資料3について説明し了承された。

(3) 高等学校教育改革に係る経緯について

- 事務局から、資料5から資料6について説明した。

4 意見交換

(1) 学校規模・配置の検討について

- 事務局から、資料7から資料8について説明した。

■ 進行役から、地域校について、東青地区では募集停止等によって高校への通学が困難な地域が新たに生じる高校があるのか事務局に確認があった。

→ (事務局) 資料7の5ページにあるとおり、第1期実施計画では青森北高校今別校舎を地域校として配置したところであるが、基本方針に定める基準に該当したことから、令和2年度に募集停止としたところである。

基本方針における地域校の配置の考え方について改めて確認すると、高校への通学が困難な地域については、公共交通機関の状況を考慮し、総合的に判断することとしている。具体的には、路線の整備状況、利用時間帯、利用時間の視点を踏まえて判断していくことになるが、その結果、東青地区においては地域校に該当する高校はない。

○ 上磯地区の唯一の高校である青森北高校今別校舎が、基本方針に基づき令和4年3月に閉校予定となっている。今別町としては、地域の活性化のために高校の存続を第一に考え、高校の特色ある教育活動を支援してきたが、このような結果になって大変残念に思っている。

地域校については、入学者数が極めて少ない状況となった場合等には、募集停止に向けて当該高校の所在する市町村等と協議すると謳われているが、地域住民から見ると、募集停止するかどうかを協議すると勘違いされている部分があるため、今後表現の見直しを検討していただきたい。

→ (事務局) 地域住民にとって地域校の存廃が曖昧という意見は、他の自治体からもあったため、今回の基本方針の改定において、基準に該当した場合の取扱いについて、翌年度の募集停止を基本とするということで対応を明確化したところである。

■ 進行役から、重点校である青森高校、拠点校である青森工業高校及び青森商業高校に対し、重点校・拠点校の取組及び必要と考える学校規模について説明を求めた。

○ (青森高校) 重点校の取組内容については、大きく分けると、教職員の研修、生徒の学力向上の2つに分類される。取組の参加案内は、東青地区に限る場合もあるし、範囲を広げて下北地区や全県に対して行う場合もある。

具体的には、医学部志望者対象の学力向上セミナーとして、医学部を志望する子どもたちが40～50名集まり、予備校からレベルの高い講師を招いて講習会を行っている。また、東京大学や京都大学など最難関大学を志望する生徒のために合宿も行っている。さらに、弘前大学医学部医学科を目指す生徒のために、東青地区及び下北地区の生徒を集めてワークショップを行っているほか、起業ビジネスモデルの策定のためのワークショップも行っている。

先生向けの取組としては、先程事務局から説明のあった英語のディベート勉強会のほか、探究型学習の研修会や、共通テストに関する研修会を実施している。

青森高校は現在7学級であり、近々6学級になる予定であるが、おそらくは医学部志望者数や最難関大学志望者数はそれほど変わらないだろうと思っている。学校規模としては、1学級、2学級減になっても、維持できるのではないかと。

重点校の効果として、数値的な検証は難しいため明言はできないが、同じ志を持って一つの目標に向かってお互い切磋琢磨することで、学力向上、やる気の向上に非常に効果があると思っている。

- （青森工業高校） 資料では、青森工業高校はボイラー技士の受験合同講習会の事例が紹介されている。このほか、今年度については5件の取組を進めているところである。

ここで挙げているボイラー技士の受験合同講習会について、本校と連携しているむつ工業高校の学校規模は、現在、1学年3学科3学級であり、学科数が本校の半分以下であるため、本校の各学科のノウハウを生かし、お互いに交流を図り、むつ工業高校で学ぶことができないものについて情報提供しながら資格取得を目指している。

また、文化祭などお互いの学校行事を視察する交流や、学校公開日を設けて職員の研修等を実施している。

さらに課題研究の発表会にも双方出向いて、どのような内容で普段学習しているのかという情報交換等を行い、職員、生徒で交流を図っているところである。

このほか、ものづくりコンテストとして、電気、建築、機械、様々な部門でのコンテストが実施されており、切磋琢磨しながら技術の向上を図ることを目的に参加している。コンテストに向けての取組は各学校で実施しているものの、コンテスト終了後に合同反省会を実施し、次年度につなげていくこととしている。

取組の効果については検証できていないが、いずれにしても何らかの刺激にはなっているのではないかと考えている。

学校規模については、本校は現段階では7学科、次年度以降、電子機械科が募集停止になるため6学科になるが、連携校であるむつ工業高校にない学科の学習内容についても色々協議しながら情報を交換していくことを踏まえると、拠点校の規模として一つの専門学科で4学級以上と示されているが、5学級、6学級という規模を必要とすると考えている。

- （青森商業高校） 商業科の拠点校として、教員の研修会、資格取得に関する講習会の企画運営を本校が中心となり、商業を学ぶ生徒や教員を集めて、講習の機会を設け、県全体の商業教育の質の向上を図るために取り組んでいる。

資料7の4ページにあるCMSを活用したウェブサイト制作講習会など14件の取組を行っている。会計に関わる分野、情報に関わる分野、マーケティングに関わる分野、特に起業に関する取組を行うために、教員や生徒を集めた講

習を行っている。

これらの効果としては、数値的な検証までできていないが、先生方の質の向上が挙げられる。また、生徒が意欲的に参加しているということが感想文から得られている。

課題としては、講習の案内をしたところ、商業高校の先生方には参加していただけるが、それ以外の学校に配置されている商業科目を教える先生方に対して様々な機会を提供し、科目を指導できる、資質を向上できるような取組をしなければいけないということが一つの課題になっている。

拠点校の学校規模は4学級以上と示されているが、先生方の資質向上を図るための取組や生徒の意欲という点では、本校の5学級は維持していただき、拠点校として商業教育の質の向上を図っていただければと思っている。

- 学級数について、普通科の重点校は6学級、基本となる学校は4学級以上としているが、前回は参加したときに、青森高校の校長先生が1学級減らすと専門の先生の人数が減るという話をしていた。

例えば英語であれば、英語科の先生が専門で各学校にすることが基本だと思うが、そのときの校長先生の話によると、専門の先生がいなくなるおそれがあり、専門外の先生が生徒に教えるという形になるのではないかと危惧していた。学級数が減っていく際の先生の配置はどのようになっているのか。

- (事務局) 高校の教職員の定数というのは、公立高等学校の適正配置及び教職員定数の標準等に関する法律に基づいて算定することになる。この算定は学校の募集人員の総数で決まっているため、もし学級数が減っていくことになれば、教職員定数も併せて減ってしまうことになる。その結果、教科、科目の開設が難しくなることが実態としてある。基本方針本冊の26ページに科目の開設状況が掲載されているが、学級数に応じて、理科や、地理歴史、公民の開設科目が減っており、教職員定数が減ることによって、その科目の開設も減るといった対応となっている。

- 重点校、拠点校の配置の考え方については、このままで良いと思う。今別町の学校の校長先生等に聞くと、重点校、拠点校の役割等がいまいち理解されていないというのがあり、一般県民も同様と思っている。一般的にみんなが分かるように周知していただければと思う。

また、今はもう成果も出ていると思うので、連携校についてもどのような取組をしているのかなどアピールしていただければ良い。

- 進行役から、東青地区の学校規模・配置について、全委員に意見を求めた。

- 学校配置については先程発言したため、そのほか事務局に確認したい。第1期実施計画の期間内増減については、動かないものなのか。あくまでも計画のため、状況変化により変更することがあるのか。

また、法律では1学級当たり40人であり、本県では、普通高校であれば1学級当たり40人としているが、工業高校など職業高校では35人学級を実際に導入している。普通高校も35人とすれば学級減をしなくても済むと考える。ただ、法律上、先生が配置されないということがあるが、小・中学校でも「あおもりっ子育みプラン」として県単独で少人数学級を導入しているところであり、県の子どもたちを育てていくという観点から35人学級の導入が可能なのか。もしそれができないのであれば、普通高校で特色化を図っているスポーツ科学科などに35人学級を導入していければ、第2期実施計画では大きく統合するのではなく、学級減で対応できると考える。

地域校については基準があるが、浪岡高校のような2学級規模の学校に対する募集停止の基準が明確でない。募集停止とした場合に理由が問われると思うため、今回は基準を決めていった方が良いのではないかと。

- 明確に子どもたちが減ってきたにもかかわらず、1学級当たりの生徒数がほぼ変わらない。ましてや、先生方の定数についても全然変わらないという状況である。専門科目が開設できなくなっていくという状況を見ると、1学級当たりの生徒数を少なくしつつ、先生方の定数も増やすなどの取組が中長期的に必要と思う。

第2期実施計画期間では4学級減らさなければいけないという状況にあるが、重点校や拠点校などの規模を守りながら減らしていくしかない。

また、地域校については、青森北高校今別校舎が残念ながら令和4年度からなくなる。そのため三厩や竜飛などにいる子どもたちが青森市の方へ通学するとなると、時間的な問題や下宿が必要となることがあるため、そのことも十分考慮していただきたい。

- 重点校、拠点校については、このような形で良いと思う。重点校や拠点校の取組を更に深めていただきたい。また、中学校現場などにPRすれば、狙いを持った子どもたちが受検してくるのではないかと。重点校は、例えば選抜制の高い大学進学への対応、グローバル教育への対応など様々あり、拠点校は専門的な勉強をするということ非常に意義があるため、そこはしっかり守って、重点校、拠点校を中心に、子どもたちのニーズに合わせていただければと思う。

地域校について、青森北高校今別校舎が閉校になると、上磯の子どもたちはおのずと青森市内の高校を受検するしかないわけで、例えば三厩の子どもたちが青森市内に通うとなると、三厩駅から青森駅までJRの定期券で月13,140円かかる。これに加えバス代がかかる生徒もいる。また、青森工業高校のある野内駅まで行くには、月18,510円かかることになる。通学が困難な中で部活動を行う場合は下宿代がかかり、経済的にかなり負担が生じる。外ヶ浜町としては、通学定期の3割助成に取り組んでおり、県としてもそのような助成や奨学金の拡充など何かしら補助があれば、子どもたちは意欲を持って通えると思っており、対応をお願いしたい。

- 35人学級編制のように県独自の教員の配置方法を導入するなど、特色を出していけば良いと思うのが一つ。

また、いつまで学級減で対応できるものなのか。もう少し学校自体を減らし、ある程度の規模を保ちながら、子どもたちが色々な授業や部活などを選べるような学校を作りたいというのが、保護者の気持ちとしてある。

東京には県の学生寮がある。弘前、青森、八戸などに立派なものでもないので、寮を配置すれば遠方から通学する生徒や保護者も少しは経済的に楽になると考える。こちらは、全国から生徒を募集するに当たっても利用できると思う。

- 重点校や拠点校は目的、役割を持って配置されていると思うため、今後もそのような目的を持って続けていただければ良い。

また、生徒数の減少に伴って学級数を減らすという考え方でいくと、倍率の低いところはその対象にもなってくると思う。

私は三厩が地元のため、各委員から通学について意見を発表していただき大変ありがたく思っている。現状、三厩の子どもたちは6時15分発の津軽線で青森市内の高校に通学している。そのために父兄が4時過ぎには起きて、弁当と津軽線で食べていくおにぎりを作っており、なおかつ竜飛など遠いところになると10分、15分かけて車で送って、三厩駅から青森駅へ向かうという毎日である。現在、下宿が青森市内にほとんどない。アパートとなると、保護者が対応することになるがそれもなかなか厳しい状況にある。

- 国公立大学の進学率、私立大学の進学率などの数値は出ているが、青森県全体で全国での偏差値ベースの競争力が下がっているような気がする。それであれば、重点校の青森高校、進学校の青森東高校、青森南高校の募集人員を削減することで、入学する生徒の偏差値が上がり、競争力が出ると思っていた。一方、学級数が減少すると専門的に指導できる先生方が減ってしまうということを知り、そうなれば本末転倒であるため、1学級当たりの生徒数を削減して、学級数は維持するなどにより、偏差値を上げるような専門性の高い教育をできるようにすれば良い。

また、資料5の4ページの全国からの生徒募集の導入について、生徒数が少なくなっていく中で非常に大事な取組と考えている。ただ制度的に青森県で入学できるというだけでは特色もないため、他県から生徒が入ってくるとは考えられないので、青森県に来ないと受けられない授業など、何か特色あるカリキュラムがあれば良いと感じた。

(休憩)

- 進行役から、事務局に対し、これまでの委員の質問に対する回答を求めた。
→ (事務局) 資料7の2ページにある令和4年度時点の学校配置状況に関して、

第1期実施計画の期間内増減については、このとおり計画を進めているところであるため、この数値が前提になるものである。

1学級当たりの生徒数を削減することについては、法律により1学級の生徒数は40人を標準としているところである。先程御説明したとおり、この法律に基づき、教職員定数が学校の募集人員の総数により定められているため、1学級当たり40人を下回る人数とした場合、1学級当たり40人の高校と比べて、学級数は同じでも教職員定数が少なくなることから、大学受験に向けた科目開設が難しくなるなどの課題がある。学級編制の見直しについては、御意見としては承るが、今回学校配置を検討する上では、1学級当たりの人数を減らすという考えではなく、マイナス4学級を学級減もしくは統合などで解消する形で、1学級当たり40人という考えの下、進めていただきたい。

2学級規模の学校の募集停止の基準については、高校教育改革の基本的な考え方にも影響するため基本方針に関わるものである。この基本方針については、外部有識者で構成する基本方針検証会議でも検証、検討していただいたところであり、改定したばかりであるため、現段階で新たな基準の創設は考えていない。

通学費等の補助については、青森県育英奨学会と連携し、今年度から返還免除型の奨学金制度を創設している。こちらは、経済的に困窮している世帯が対象になるが、通学費は月額1万円を超える金額、下宿費は月額1万2,000円を超える金額について、奨学金の返還を免除するという制度を新たに創設したところである。

- 商工会議所として、拠点校である青森工業高校及び青森商業高校に関して様々な補助などお手伝いできないかと考えている。

保護者の観点として、学級数の削減等により先生の数が少なくなるということであれば、学校の質の問題も出てくると思うため、統廃合しても良いと思っている。様々な弊害はあると思うが皆様と意見交換しながら進めていければ良い。

- 資料で浪岡高校の話が出てきているが、最近バドミントンなどのスポーツでも、文化活動でも、先生方の取組でも非常に頑張っていることは報道等で接している。一方で数字を見るとこれから更に小規模化していくのであれば、生徒が入学してから、できることとできないことがある。浪岡地域の子どもたちを含め、どのような学校を提供していくのが良いか真剣に考えなければいけない。

大規模校と小規模校を統合した場合、同規模校を統合した場合、3校・4校を統合した場合など、既に取り組んだ実例がある。事務局からシミュレーションを示していただければ、実例を踏まえ発言しやすくなると考えている。特に青森市教育委員会教育長が欠席のため意見を伺いたいところだと思う。

定時制・通信制については勤務経験があるが、学び直しの生徒たちもたくさんいる。また、様々な困難等を抱えて入学する生徒たちもいるため、これ以上

狭めたりすることは現実的ではない。最後のセーフティーネットとしての役割を十分果たしているため現状どおりが良い。

- 望ましい学校配置については、学級減等で対応し、できる限り存続させた方が良い。家庭の経済的理由によって通学費や下宿代等の出費がかさむことで、やむなく高校進学を断念してしまうことにもなりかねない。公教育を受ける機会を失わせてしまうことを懸念している。確かに教育の成果を上げるための望ましい集団規模ということは十分分かるが、小規模の集団や異年齢集団での教育活動、あるいは地元の高齢者等との交流を通して育まれる優しい心や思いやりの心、地元の伝統芸能を継承する課外授業等を通して自覚が芽生える郷土愛、そのようなことは地元で学ぶことにより育まれる様々な資質・心ではないのかと考える。同年代の、同年齢の集団の中でもまれて育つ心ばかりが望ましい集団、教育の効果を見る集団規模とはならないのではないか。

平内高校の校長のときに、当時の平内町長が「町内を若い高校生が歩いている姿を見るだけで、地元の人たちがどれだけ元気づけられているのか計り知れない。」と話していたことが今でも耳に残っている。残念ながら青森東高校平内校舎は、来る11月7日に閉校式を迎えることになるが、ある意味仕方ないと思っている。

現在、重点校は各地区それぞれ1校指定されているが、勉強においても、スポーツにおいても、ライバルの存在は大変大きい。ライバルに負けじと切磋琢磨する中で実力向上が図られ、結果としてお互いのレベルアップにつながっていくものと感じている。このことから重点校を各地区2校にすることが本県高校教育の活性化につながるものと考えている。具体的には、東青地区は青森東高校をもう1校重点校として格上げすべきと考えている。

第1期実施計画によれば、グローバル教育等の特定の分野における先進的な取組を重点校に担わせると謳っているが、各地区の2番手あるいは3番手の学校をグローバル教育等の推進校にしてはどうかと考えている。東青地区は青森南高校に外国語科が設置されているため、推進校にすると良い。

- 35人学級編制に関連して発言すると、小・中学校では研究に対応するための教員加配、生徒指導等に関する教員加配など、様々な面で教育委員会からの加配で対応している。

また、青森市内の高校に関して統廃合には反対する。小・中学校はもちろん高校も含め学校は地域の中核になる。色々な地域で高校生の動きを期待しながら見ている。青森市でもそのような気持ちで大人は見ているという話をPTA等からもよく聞く。

高校においても通級指導など特別支援教育に力を入れていると聞き、大変うれしく思う。小・中学校には特別支援学級があり、生徒の持っている能力によって普通学級と一生懸命交流させるといふ強い意思を持って学校を運営している。このような取組を続けていくことは、この地区、この県の能力をさらに発

揮できる大きな要素だと思う。

- 重点校、拠点校の状況や今後の生徒数の推移などの説明を受け、理解できる部分もある。ただ、青森戸山高校が統廃合となった際に中学校で進路指導の経験があるが、指導に非常に困った。中学校3年生の保護者や生徒が今後3年間高校生活を安定して楽しく送ることが大前提である。点数的なものや、部活動、サークル的なこと、様々あると思うが、子どもたちの興味関心に合った高校を勧めてあげたいと思う反面、自分の本来の志望とは違うところに進学するという現実もある。

中学生は早ければ5～6月には進路に向かって突き進んでいく状況になるため、早めに高校教育改革の情報を示していただきたい。学校側としても、子どもや保護者に説明し、望ましい進路や子どもの思いを酌み取って進路指導を進めていきたい。

- 今回の生徒の減少による高校の学級減は理解できる。重点校及び拠点校の配置についても理解できるところが大きい。定時制・通信制の配置についても、希望者は少ないにしろ、継続していくべきだと思う。

青森県の実情を考えると子どもは少なくなっている。これは若者が県外に就職するからだと思う。青森県に就職口がなかなかない、東北でも青森県の高卒の就職率が一番低いと言われている。高卒でも青森県内に就職できるよう高校と企業がタイアップするなど、特色ある事業を起こして中学校や高校に周知していけば、若者が青森県に就職し子どもの減少に少しでも歯止めがかかるのではないかと思っている。子どもも学校も減っていくので工夫が必要である。

- 学校規模の標準である1学年4学級以上について疑問に思っていたが、資料を見て納得した。学校規模が小規模になることで教員配置や部活動にも影響することについて周知することが大事なことではないかと思う。

実は、統廃合に関わった経験があり、合浦小学校を閉校しようとした際には地域の人達から猛反対に合い、結局は統廃合が中止になった。今は青森市内で統廃合が進んでいるが、複式学級になった際に統廃合するという基準を設けており、この基準がうまく伝わったことで統廃合が進んでいる。

高校とは実情が違うかもしれないが、地域には子どもがそれぞれいるわけで地域の実情への配慮が大事であると校長として実感している。そういう意味では通学費の補助、下宿費の補助などが絶対必要だと感じており考慮していただきたい。

全国的に生徒数は減少していく状況にあるため、教職員定数の是正に向けて、小学校、中学校、高校、そして教育委員会が全国的に国に働きかけるような動きもこれからは絶対必要だと思う。

学校規模の標準を4学級以上とすると、それ以下は東青地区では浪岡高校が該当するため、浪岡高校が廃校に向かうのかと思うと、ものすごく複雑な気持ち

ちもある。4学級が適正と納得しているが、4学級に縛られて大丈夫かという気持ちもあり、そのバランスをうまく考えていかなければならない。

- 統廃合については反対したい。重点校、拠点校はこのままでも良いと思うし、定時制・通信制は残していけたら良いと思う。

35人学級編制については良い意見と思う。法律の問題があるとのことだが、生徒数が確実に少なくなっていく中で、今の法律のままでは黙っていても廃校になるところは出てくるし、統合したら高校の数自体も少なくなる。法律の改正に向けて働きかけができないのかと思う。

青森北高校今別校舎の話もあったように、通学、下宿するにしてもお金はかかる。その場合、お金を払ってまで青森県の高校にいるのかと思う。逆に高校の段階から、県外へ流出する生徒が増えるのではないか。今の中学生がこれからどこの高校に入ろうかと考えたときに、選べる場所が少なくなると、その段階で県外に抜ける生徒が増えるのではないかと考えさせられた。

青森県内に特色がある学習ができる高校を作ることができれば、県外から新しく高校生を呼び込むことができ、できればそのまま青森県にずっといてもらえれば良い。

(2) 多様な教育制度等について

- 事務局から、資料9について説明した。

- 委員から次のような意見があった。

- 全国募集について、第1期実施計画で導入していれば、青森北高校今別校舎で盛んなフェンシングなど様々な要素を活用して、今別町、県、商工会などが連携して取り組むことができたと思っている。

是非全国募集に取り組んでいただきたいと思うが、それぞれの学校で魅力ある学校づくりに努めていくに当たり、市町村単独ではなく県が一緒になって支援してほしいと思う。

- 外ヶ浜町に来月から地域おこし協力隊の方が来るが、その方は兵庫県立村岡高校を卒業している。その高校は普通科だが、専門コースとして地域アウトドアスポーツ類型を設置し、その中に地域創造系とアウトドアスポーツ系の2つが設けられており、その方は地域創造系で学ばれたということで、色々な体験をされている。資料9にもある島根県海士町にも招待され、町長からアドバイスをいただきながら、地域活性化の様々な体験をしているようである。1年目は、地域のことを研究し、そして課題を捉えて、課題解決の方策を自分たちで研究し、最後に卒業発表を行う形でやっているようである。その体験が「地域づくりのために頑張りたい」という夢につながり、高校生活が非常に充実したものになったとのことだった。非常に特色ある高校で入学制限はかけていると

は思うが、県外からも生徒を募集している事例であり、青森県ならではの学校が設置できればと思い紹介させていただいた。

- 進行役から、具体的な校名に関する意見が少なかったため、意見がある場合は意見等記入票に記載し事務局へ提出するよう発言があったほか、事務局に対し、委員の意見に基づく具体的な学校配置シミュレーションを作成するよう指示があった。

5 閉会